

「男、突っ走る！」

第86回

第一稿

作・壽倉 雅

1 南公民館・全景

2 同・大会議室

演劇の稽古中。

雅也と阿川が演出席で見えており、美央、浩太、茜、直海がだいほんをみながら、演技のやり取りをしている。

隅でその様子を見ている昇平、啓司、麗子、緑、愛花、寿梨。

N 「十月に入り市民演劇祭に向けての稽古が本格的に始まりました。しかし、場面ごとの稽古をしていくものの、僕は演出席にしながらも的確な意見を言うことができず、重々しく、また殺伐とした空気になってしまっていたのでした」

× × ×

休憩中。

演出席で相談をしている雅也、阿川、直海、緑、昇平。

N 「相談の上、演出助手以外にも演技経験豊

富なメンバーが意見を言う演出部というグループが作られ、そのメンバーとして選ばれたショウ、ミドリさん、ナオの三人が演技指導や演出の話をするようになっていました。もはやこの時の僕は、『演出』など名ばかりの存在になっており、一人孤独な時間を過ごすことが増え始めていました」

3 同・廊下

雅也が落ち込んだようにベンチに座っている――阿川と緑が談笑しながらやってくる、

阿川「うっちー」

雅也「ああ、お疲れ様です」

緑「どうしたのよ、元気ないじゃない」

雅也「いや……演出のことが、どうも……」

阿川「……」

緑「……」

雅也「演技経験が皆無の人間が、気安く舞台の演出なんてするもんじゃありませんね……」

…」

阿川「でも、始まったからには」

雅也「もちろん。二月の本番までは、ちゃんとやります…」

緑「それにうちーは、運営の代表の仕事もあるもんね。負担も大きいでしょう。それに最近、顔の血色も悪そうに見えるし」

雅也「…」

阿川「経験が浅いから、演技経験者のメンバーたちに演技のことを指摘したり、演出付けるのは難しいだろうけど、この作品の演出はうちーなんだから。いろんな意見を聞いたうえで、最終的にゴーサインを出すのが演出。それは、意識しといたほうが良いよ」

緑「演出部は、あくまで参考意見を言うポジションだから、必ずしもそれが正しいとは限らないんだよ。意見の中で、これはうちーの中で思ってるものと違うと思えば、そう言ってくれないと。数ある意見の中で、

決定をするのはうちーなんだから」

雅也「はい……」

阿川「テンションあげていかないと。まあ、演出っていうのは孤立するポジションだからね。僕もさ、自分の劇団で演出するときには、結構孤独と戦ってるよ」

緑「結婚前から一緒に劇団にいるから分かるけど、本当に演出って、周囲の人が思う人以上に大変なんだから」

雅也「それを、嫌ってほど痛感してます」と、茜がやってくると、

茜「あ、うちー。箱のこと、どうしようか？」

雅也「箱？」

茜「ほら、この間相談したじゃん。予算の調整ができたから、大道具として使う木箱を作ろうって」

雅也「ああ……そうだった」

茜「どうする？ 誰か、箱の設計造れる人いるかな」

雅也「ナオかショウに、一回相談してみてる」

茜「うん、わかった」

と、大会議室の中へ入っていく。

阿川「箱作るの？」

雅也「ええ。予算調整して、箱を作る余裕ができたので、国枝さんからオツケーもらえたんです」

緑「代表なのに、国枝さんの許可がいるんだ」

雅也「代表なんて、所詮は名前だけ。決定権は、国枝さんにあるんですから」

緑「これじゃあ、うちーが何のために代表やってるのか分かんないわね」

雅也「……」

4 同・大会議室

茜、昇平、直海が話している。

昇平「箱？」

茜「そう。『スリジェネ』の大道具として、箱を作ろうと思ってね。ショウ、箱の設計

できる？」

昇平「木箱って、普通の箱で良いんだろ？」

茜「うん。何箱かを合わせて机とかに見立て

ようかと思ってる」

昇平「シンプルな箱だったら、それで設計図

書くわ」

茜「ありがとう」

直海「私も何か手伝おうか？」

昇平「作る時の人が欲しいな」

直海「じゃあ、私作るときに参加するわ」

茜「人は多い方が良いけどね。でも、なかなか

か揃わないか」

昇平「まあ、みんな忙しいからな。とりあえ

ず、設計図進めとくわ」

茜「よろしく」

5 ホームセンター

商品棚に立てかけられている木の板を

見ている雅也、阿川、昇平。

N「それからしばらく経ったある休日、僕は

阿川さんとショウと共にホームセンターで、木の箱を作ることになりました」

× × ×

隣接の工房で、それぞれ釘打ちをして
いる雅也、阿川、昇平。

昇平「結局、全然集まらなかったな」

雅也「ごめんね、せっかくの休日なのに」

昇平「気にするな。演劇の作業で予定が埋まっても、俺は何とも思わないよ」

阿川「劇団作ってすぐの時、僕もこうして箱作ったもんだよ。やっぱり、最初ってないものをイチから作らないといけないから、いろいろ大変だけど、それさえ乗り越えればね」

雅也「まあ、それはそうなんですけどねえ」

昇平「こういう時、運営って手伝ってくれないんだ」

雅也「ヤマさんは自分の劇団の稽古があるし、国枝さんも予定があるみたいでね。コウタはバイトで、とみーも大学の予定があるん

だつてさ」

昇平「予定があるのはみんな同じだし、元々箱を作る予定があるのは分かってたんじゃないか。メンバーだつて、誰も来ないし」

雅也「ナオは、学校の用事が済んだら来るつてさ」

昇平「意外とみんな、非協力的なんだな。せめて運営が誰か来ていれば、メンバーにも来るように催促できるけど、運営がうच्छーだけじゃあね。運営の方、上手く行ってるの？」

雅也「……」

阿川「シヨウ、あまりそう言わずにさ」

昇平「俺はただ、こういう時に誰も作業に來ないのがおかしいんじゃないかって言ってるんです。用事があるのはみんな一緒ですし、少しぐらい顔出したつて」

雅也「シヨウは名古屋から来てくれてるし、

阿川さんも豊田から来ていただいて……」

阿川「いやいや、そういううちーだつて地

元民じゃないじゃん」

雅也「まあ、それはそうですね」

昇平「うちーがもつと言った方が良いと思

うよ。何で来ないのかって」

雅也「……」

と、直海がやってくる。

直海「ごめん、遅くなりました」

雅也「ああ、ナオ。ありがとう、来てくれて」

直海「あれ、これだけ？」

昇平「ほら、こういう反応になるだろ」

直海「何の話？」

阿川「箱作りを手伝ってくれる人がすくない

って話してたんだよ」

直海「ああ、なるほど」

雅也「人を呼べないのは、運営の力不足です。

ごめんなさい」

直海「何もうちーが、謝ることないよ」

雅也「……」

直海「ほら、人が少ないんなら、その分テン

ポ良くパパッとやっちゃおう。（と昇平に）

どうやったら良い？」

険しい顔の雅也——不安そうに見ている阿川。

6 木内家・雅也の部屋（夜）

木箱が八箱積まれている。

その中で、パソコンで仕事をしている雅也。

N 「約一日かけて木箱は八箱完成し、置く場所がなかったため、その箱は僕が引き取ることになりました」

物珍しそうに箱を眺める雅也。

7 中央交流センター・ラウンジ

雅也、佐代子、山中、茜、浩太が運営会議をしている。

雅也「（次第を見ながら）では、年末のカウントダウンイベント出演について、国枝さんお願いします」

国枝「はい。先日、農場公園で毎年大晦日に

開催されるカウントダウンイベントの実行委員会の会議に参加してきました。そこで、室内ステージがあるようで、実行委員の方から、出演をしてみないかという相談を受けました。私としては、このイベントでは大晦日とはいえ、たくさんのお客さんが来場されるので、『スリジェネ』の名前を広めるには、良い機会かと思っています」

山中「名前を広めるには、確かに良いイベントの場だと思いますけど、『スリジェネ』は今、演劇祭の稽古の真っ只中です。それに、カウントダウンとなると、残り二ヶ月しかありません。そんな短い期間で稽古して、人前で見せるクオリティの作品が仕上がるとは思えません。稽古の掛け持ちだつて、メンバーにも負担でしょうし」

浩太「……」

茜「……」

佐代子「演目そのものは約十五分ぐらいです。例えば、芝居は最小限にして、既存の歌を

使った、プチミュージカルみたいなものにしてはどうでしょう？」

山中「既存曲を使うにせよ、演目を作り上げるのには、それなりの時間がかかります。それに、脚本や演出は誰がやるんですか？俺もうちーも、演劇祭抱えてますから、これ以上新規作品の演出をするのは無理です」

佐代子「（雅也に）うちーは、どう思う？」
雅也「今、演劇祭の稽古をしていますから、更に別作品の稽古を入れるのは、スケジュール的に厳しいものがあるかと思っています」

佐代子「十五分でもダメかしら？」
雅也「それに、先ほどヤマさんも仰ってましたが、演目の脚本や演出は誰がやるんですか？」

佐代子「阿川さん、どうかしら？」

雅也「え？」

浩太「……」

茜「……」

佐代子「劇団の運営や、作品の演出もできるし」

山中「阿川さん本人が、どう判断するかですけどね」

佐代子「じゃあ、私から相談してみます」

雅也、茜、浩太、険しい顔でお互いの顔を見合う。

8 カフェ

雅也、茜、浩太が話している。

浩太「国枝さんは、現場にきてないから折れたい立ち退く大変さなんて、何にも分かってないんだな」

茜「十五分って言うけど、その十五分を作り上げることが、どれだけ大変か。ねえ、うちー」

雅也「うん……」

浩太「あれは、強行突破するんじゃないかな」

茜「強行突破って？」

浩太「国枝さんは、総合プロデューサーだ。」

いくら代表のうちーがやらないって言ったところで、総合プロデューサー判断でどんな手を使ってでも、やるって言うにきまってるよ」

茜「まあ、その可能性はあるね」

浩太「演劇祭の稽古もあるのに、更にそこから別作品の稽古するって言うのは、結構キツイいな」

茜「当たり前前じゃん。ただでさえ、演劇祭の作品は私とコウタとミオのトリプル主演みたいな作風で、出番だっって一番多いんだから。それに、うちーが演出となると、普段以上に時間だっってかかるだろうし」

雅也「ごめん……」

茜「（慌てて）いや、別にそれが悪いって言うてるんじゃないの。演出経験がないうちーがやる作品だから、『七夕物語』のときみたいにはいかないだろうってこと」

雅也「うん……」

浩太「だったらなおのこと、無理だっって。も

し仮に、カウントダウンイベントが決まっ
たとしても、俺やとみーやミオは、出番の
少ないチョイ役にしてもらわないと」

茜「そうだね」

雅也「それにさ、全員が全員、出れるとは限
らないよね？」

茜「確かに。あ、でも逆に、今回演劇祭に出
られなくなったレイナに声をかける可能性
もないとは言えないよね」

浩太「あり得るな、それ」

雅也「全員参加じゃなくても良いなら、とみ
ーやコウタが出ないっていうのも良いと思
うよ。それに、ショウだって年末年始だと
実家のある岩手に帰るんじゃないかな」

浩太「そういえば、年末帰るようなこと言っ
てたな」

と、一同のスマホに通知が来る——雅
也、茜、浩太、思わず顔を見合う。

茜「絶対、運営からだね」

浩太「だな」

雅也、スマホを取り出すと、険しい顔になる。

茜「何だって？」

雅也、黙ったままスマホの画面を茜と浩太に見せる。

浩太「（佐代子のLINEの文面を読み上げて）『お疲れ様です。阿川さんと相談した結果、脚本と演出のオッケーをいただきました。うっちー、演劇祭とのスケジュール調整を至急行ってください。めんばーについては、基本事情がない限りは、何かしらの役で出演してもらおう思ってます』。マジか……」

茜「やっぱり、私たちの予想当たったね」

浩太「出番少ない役にしてくれて、国枝さんに頼んどこうかな」

茜「脚本と演出は阿川さんだから、直接聞いてみたら？」

浩太「そうするわ」

雅也「スケジュール調整しろって、簡単に言

わないでほしいな……」

大きな溜息をつく雅也。

9 居酒屋（夜）

テーブル席で待っている雅也。

N 「その数日後。僕は、メンバーであるレイ
コ姐さんから呼び出しを受けました」

麗子が入ってくる。

麗子 「ごめんなさい、お待たせしちゃって」

雅也 「いえいえ。それで、相談したいことつ
て？」

麗子 「実は、今後の『スリジェネ』の活動の
ことなんです」

雅也 「……」

麗子 「演劇祭に向けて脚本も書いていただい
たのに、こんなこと言うのは酷いと思うか
もしれないんですけど……私、『スリジェ
ネ』を辞めようと思ってるんです」

雅也 「やっぱり、仕事との両立が難しいです
か？」

麗子「それが、一番の理由です。演劇祭だけじゃなくて、今度はカウントダウンイベントも決まったでしょ。私、そんなにたくさん出れるほど余裕がなくて」

雅也「カウントダウンイベントは、強制参加ではないですよ」

麗子「分かっています。でも、夏の『七夕物語』が終わってから、仕事のほうをいろいろ優先して、稽古にも数え切れるぐらいしか行けてませんでした。稽古に行けないということは、その分一緒に出演するメンバーにも迷惑がかかってしまいます。なので、これ以上迷惑をかけないうちに、メンバーを脱退しようかと思って」

雅也「……どうしても、『スリジェネ』に残る気持ちはないんですか？」

麗子「気持ちとしては、『スリジェネ』はやりたいです。ただ、仕事のほうも忙しくなってしまうって、最近は何日も学校に行ってるんです」

雅也「学校の先生がお忙しいのは、僕だって分かってます。ただ、やっぱり今抜けられると……」

麗子「そりゃ、もう脚本もある程度決まって、私の配役も考えてくださってるので、今ここで私が脱退したら、また脚本の修正やキヤスティングをし直さなければいけないのは、本当に申し訳ないと思ってます」

雅也「レイコ姐さん……」

麗子「稽古に全然参加できないと、作品のクオリティにも影響します。私のせいで、『スリジェネ』の作品のクオリティを落とすのは、忍びないんです……」

雅也「……」

麗子「わがままだっというのは、百も承知です……ごめんなさい」

返す言葉もなく黙ってしまう雅也。

N「結局、そのままレイコ姐さんは『スリジェネ』を去ることになりました」

10 木内家・雅也の部屋（夜）

頭を抱えながら、パソコンで原稿を書き直している雅也。

N 「レイコ姐さんが去って間もなく、僕は脚本の書き直しをしようとしていました。が、まるでそこに追い打ちをかけるように、メンバーのシノブとユミが、自分の好きなことに向かってもっと挑戦していきたくいと脱退し、マリエは歯科衛生士の国家試験の勉強に専念したいからとしばらく『スリジェネ』の活動を休止することになってしまいました。立て続けにメンバーがいなくなりました。『スリジェネ』の普段の稽古の雰囲気は、結成から半年近くが経って、史上最低な雰囲気になってしまっていたのでした」

つづく